HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	‘共感’の心的デザインの再構築 ： 自他間の情動共有システムを出発点としたボトムアップアプローチ [論文内容及び審査の要旨]
Author(s)	村田, 藍子
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第12083号
Issue Date	2016-03-24
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/61701
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Aiko_Murata_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称：博士（文学）　　氏名：　村　田　藍　子

学位論文題名
‘共感’の心的デザインの再構築
−自他間の情動共有システムを出発点としたボトムアップアプローチ

人は、他者の行動の背景には、願望・意図・信念・知識といった目に見えない心的状態があることを理解し、また、他者の行動に基づいてそれらの心的状態を推論する能力を持つ。この能力は社会的知性と呼ばれ、複雑な社会的相互作用を支える基盤の一つとして考えられている（Byrne & Whiten, 1988）。また、社会的知性に加え、他者の苦痛や嫌悪を観察するだけで自分が苦痛を経験した時と同じような生理反応や神経活動を示すなど、他者の苦しみや不遇を無視できない心的性質も併せ持つ証拠が提出されている（Jackson et al., 2005; Singer et al., 2004, 2006; Wicker et al., 2003）。このように、他者の福利から影響を受ける社会的感受性もまた社会生活において重要な機能を持つと考えられている（Preston & de Waal, 2002; Singer & Fehr, 2005）。こうした社会的知性や社会的感受性は社会心理学において、「認知的共感（Povinelli, 1993）」、「情動的共感（Mehrabian & Epstein, 1972）」、「共感的苦痛（Hoffman, 1981）」「共感的配慮（Batson, 2011）」など、「共感」というキーワードで言及されてきた。

共感の社会的機能に関わる一つのアジェンダとして、共感が向社会行動の背景にあるとする議論がある。Singer と Fehr は、社会的感受性によって、他者の情動を知覚すると、知覚者の情動に関わる神経回路が自動的に活動し、「向社会的衝動」が芽生えると論じている（Singer & Fehr, 2005）。同様に、情動共有を向社会行動や相手に合わせた援助行動を支える核であるとする主張もある（de Waal, 2008）。一方、Batson（2009）は社会的知性の重要性を強調し、相手の視点に立つことが向社会行動の必要条件であると主張する。これらの議論から、社会的感受性（情動を共有するシステム）と社会的知性（心的状態を推論するシステム）はそれぞれ向社会行動にどのように寄与しているのか、という問いが導出される。

第 1 章から第３章ではこの問いに関し、実証的な知見をもとに議論する。まず第１章では、共感について社会神経科学の知見を基に整理した Zaki と Ochsner の議論（Zaki & Ochsner, 2012）を紹介する。彼らは従来の研究の多くが、他者の心的状態の推論を要求する課題か、他者が苦痛を受ける場面を見せ、反応を計測する課題のどちらか一方を用いてきたため、心的状態の推論と情動共有の過程が独立に検討されてきたことを指摘する。その上で、情動共有と心的状態の推論の一方、または両方がどのように機能することで向社会行動が生じるのかを明らかにするためには、二つのシステム間の相互関係を実証的に検討することが重要であると論じている。

それを受け、第２章では、相手の心的状態の推論を要請する教示が、情動共有のプロセスの一端を担うとされる表情模倣にどのような影響を及ぼすかを検討した実験研究について報告する。表情模倣とは、他者の感情表情を観察することにより無意識的に同様の表情が生じる現象であり、表情を知覚してから１秒未満の間に生じる自動的・反射的反応であることが知られている（Dimberg et al., 2000）。実験では、他者の感情表情の映像を観察する際に、相手の心的状態を尋ねる条件（感情推測条件）と、心的状態について尋ねない条件（統制条件）を設け、筋電位、および視認コーディング手法により観察者の表情筋の活動を計測した。その結果、感情推測条件では統制条件に比べ、より頻繁に表情模倣が生じることが一貫して示された。相手の心的状態の推論を求められることによって、表情模倣が促進されることを示すこの知見から、これまで伝統的には、文脈に依存せず自動的に起きると考えられてきた情動共有が他者の心的推論を担う高次の認知過程によって修飾を受けるという相互関係が明らかになった。

さらに第３章では、情動共有と心的状態の推論の相互関係が向社会的配慮にどのように寄与し

ているのかを検討した実験研究について報告する。実験では、より高度な推論が要請される状況として、「自分とは感受性が異なる他者」の心的状態を推測させる場面を設定し、心的状態の推論と情動共有の相互作用が向社会的配慮の個人差とどのような関係にあるのかを検討した。具体的には、「感受性が異なる他者」である、全盲者の映像を観る条件と、「感受性が類似した他者」である晴眼者の映像を観る条件を設定し、各条件において対象人物が強い閃光（視覚的刺激）を当てられる場面と、高圧音（聴覚的刺激）を聴かせられる場面の映像を観た際の参加者の生理的情動反応（指尖容積脈波）を計測した。結果、晴眼者に対しては参加者の情動反応は両場面で喚起されたのに対し、全盲者に対しては聴覚刺激呈示時のみ情動反応が喚起され、視覚刺激呈示時は喚起されなかった。ここから、参加者は相手の感受性に応じて情動反応を調整していることがわかった。さらに、晴眼者条件における視覚刺激呈示時の情動反応（純粋な情動共有）と向社会的配慮傾向は相関しなかったのに対し、全盲者条件において視覚刺激呈示時に情動反応を抑制した（相手の感受性に基づいて情動反応を制御した）参加者ほど向社会的配慮傾向（Davis, 1983）が高かったことから、総合すると、情動共有が自動的に向社会的衝動を引き起こすのではなく、心的状態の推論に基づき情動共有の程度を調整する制御機構が向社会的配慮を下支えしていることが示唆された。

転じて、第４章では、共感の社会的機能に関わるもう一つのアジェンダである、社会的感受性をもつ個人が相互作用することによってどのような帰結がマクロレベルで生じるのかという問いを扱う。現実のコミュニケーション場面では人々は互いの反応を参照し合うため、「誰かの苦痛を見て、その人物に対して共感する」という一方向的なプロセスだけでなく、「他者の反応から影響を受けたことによって生じた自身の反応が、表情・しぐさなどを通して表出され、再び他者の反応に影響を及ぼす」という双方向的なダイナミクスが想定され得る。しかし、従来の多くの研究では、他者の情動反応を刺激とした際の観察者の反応を測定するという一方向的なアプローチがほとんどであり、共感が生じる個人内のメカニズムのみに焦点が当てられていた。そこで第４章では、情動共有が個人間で双方向的に生じる過程を調べる実験研究について報告する。実験では、対面する二人の参加者に、同時に軽度の痛みを伴う熱刺激を与え、その際の生理的情動反応（指尖容積脈波）を計測し、互いの情動表出が観察できる条件（対面条件）と、観察できないように二人の間にパネルを立てる条件（非対面条件）の間で比較を行った。結果、対面条件では、非対面条件に比べて二者の情動反応の相関が高いことが示された。また、こうした情動反応の相関が相互作用の回数を経る中で強まることが示されたことから、互いの反応の参照を繰り返す中で次第に情動反応が似通ってくる、謂わば「情動反応の収斂」が生じたことが示唆された。さらに、二者の生理反応の相関が高いペアほど、主観的に感じる痛みの程度を高く報告していたことから、情動共有が双方向的に生じることによって、各人の情動反応が増幅するというマクロな影響が生じうることが示唆された。今後、このような現象が生じるメカニズムを検討することは、個の振る舞いの単純な総和として捉えきれない集団行動を予測する上で重要な示唆を提供すると考えられる。第５章においてはこれまでの実験研究について総合的な考察を加えながら、将来の展望について議論する。